

報告論題：「デジタル社会的市場経済の構想」

要旨

今日、デジタル技術の利用は、人間のあらゆる生活領域に広がり、それによって、経済だけでなく、政治や社会、さらには文化面においても、大きな変化がもたらされてきている。こうしたデジタル化の進展は、ポジティブな側面だけをもつのではなく、深刻な経済社会問題をも引き起こしている。それゆえ、デジタル技術を生かすとともに、その諸問題を克服しうる新たな経済社会の枠組みを見出すことは、今日の重要な課題といえることができる。

本報告では、こうした問題意識に基づき、ドイツ語圏において展開されてきたキリスト教社会倫理の視点に立って、デジタル化の時代に求められる「デジタル社会的市場経済」の構想について考察する。もちろん、デジタル化の問題に関する研究は、これまでキリスト教社会倫理の分野において盛んにおこなわれてきたわけではない。しかしながら、2020年2月28日に教皇庁生命アカデミーの年次総会で発表された、「AI倫理のためのローマからの要求」に端的に示されるように、デジタル化の問題に関するキリスト教社会倫理の研究は、近年、急速に広まってきている。

本報告では、とりわけドイツ語圏でのキリスト教社会倫理の近年の諸研究、とりわけ、2020年に出版された、カトリックの代表的論者J.ヴィーマイヤーと福音主義の代表的論者T.イエニヒェンの共著『経済倫理4.0』に主として依拠しながら、デジタル化の時代に求められる経済秩序構想について考察していきたい。その際、出発点となるのが、戦後ドイツの経済社会の基本枠組みとなってきた「社会的市場経済」の構想である。しかし、この社会的市場経済の構想は、決して硬直的なものではなく、経済社会を取り巻く諸環境の変化に対応して、たえず刷新される必要がある。そのため、キリスト教社会倫理においては、地球環境問題に対応するために、社会的市場経済の構想の中に持続性の観点を取り入れ、社会的市場経済を「エコ社会的市場経済」へと発展させる議論が展開されるようになってきているが、本報告でとりあげる「デジタル社会的市場経済」の構想は、デジタル化の進展を受け、社会的市場経済をさらに刷新していこうとする動きにほかならない。

本報告の目的は、こうした「デジタル社会的市場経済」の構想の基本的考えがどのようなものであるのかを明らかにしていくことにある。